

阿蘇を愛した息子とともに

事故の本当の原因は何かを問い合わせ続けた17年間の思い

文・柳原三佳 ノンフィクション作家



貞三さんが事故当時携行していたカメラの中に残っていた最後のスナップ写真。緒方さん夫妻はこの1枚をいつも持ち歩いている。

「このあたりの道は、息子を助手席に乗せてよく走りました。あの子がまだ中学生くらいだったから、もう30年く

らい前になるでしょうか……」

がら、ついこの間の出来事のように語り始めた。

メリハリのあるアクセルワーク。運転席と助手席がホールド性の高い「レカ

「ロ」のシートに交換されていて、あるいは、かなりのクルマ好きとお見受けられる。

けする。しかし、その人があまさか御年
85歳とは……。周囲にいるクルマはま
ず誰も気づかないだろう。

2015年10月4日、この日私は緒

卷之三

時になつて激しい台風に見舞われ、

ヘントはやむなく中止になつた。梅雨は大雨と強風と霧に遮られ、阿蘇山などいつたいどこにあるのかもわからなくなつた。

ほどだった。しかし、今回は年に一度あるかないかの爽やかな秋晴れに恵まれ、まさに最高のツーリング日和。

こがあの時と同じ場所だとは、にわかに信じられないほどだ。

のイベントに参加する道中で転倒、骨折してしまった。その後遺症がまだ残っているから今回はバイクでの参

し残りでいるため今日はノイケでの
加は叶わなかつたが、にぎやかな雰
気の中、バイク仲間とランチタイム、

メンバ

A person wearing a white racing suit and helmet stands next to a motorcycle.



去年の熊本で、『生命のメッセージ展ツーリングクラブ』のメンバーと一緒に1年ぶりの再会を喜ぶ筋屈さん（左側で立っている人）。



ケニー・ロバーツさんと二人の元気な80歳。左が奥さまの美弥さん。右は娘以上にメンバーとの交流を楽しみにしていた筆者の妻。

●やなぎはらみか
バイク雑誌の編集記者を経て
フリーに。交通事故、司法問
題等をテーマに多くの遺族
の取材を続け、各誌に執筆。
『交通事故被害者は二度泣か
れる』『自動車保険の落と
し穴』『柴犬マイちゃんへの
手紙』『遺品 あなたを失った
代わりに』『泥だらけのカル
テ』『家族のもとへあなたの
帰る』他著書多数。『巻子の
言霊』はNHKでドラマ化さ
れた。WEBサイトおよびブ
ロガースペックで情報報信中。

これからは親孝行しないと……」
笑いながら両親にそう話していたのは、つい1か月前のことだった。
実は、禎三さんはこの年の3月に医学部を卒業し、5月には医師国家試験にも合格。麻酔科医として就職先の病院も決まっていた。

また、医師としてのスタートと同時に結婚も決まっており、新居の準備が着々と整っていた。奇しくも、事故の翌日には結婚の挨拶と打ち合わせを兼ね、婚約者である彼女の実家へ行く予定だったという。

美弥子さんは母親としての無念の思いを、検察官にこう訴えた。

『息子には大切な婚約者がいました。私たち夫婦も一人の仲を認めていて、遅くとも年内には挙式をする予定になっていました。事故後、息子の収容先の病院でお会いした彼女は、見るのも労しいくらい憔悴していました。彼女の悲しみは、私たち親以上の中の人がつたと思います。加害者は、若く将来性のある息子の命を奪い、彼女の希望や将来の夢を一瞬のうちに奪い去ったうえ、彼女や私たち家族をどん底に陥れましたので、決して許すことはできません……』

長きにわたる勉学の日々を乗り越え、まさに人生これから……という矢先の、

「オートバイの列に車衝突
1人死亡、3人重傷」

とあります。

「オートバイの列に車衝突
1人死亡、3人重傷」

</div

は考えられません。そもそも警察は、加害車両とすれ違った先頭のライダーの調書すら取っていませんでした。その上、担当の副検事は、一度も現場を見に来なかつたため、事故現場の道路状況をまったく把握していませんでした。こんなことでは、捜査記録の中にどれだけ誤りがあつても、裁判が終わればそのまま『事実』として認定され……。これにはどうしても納得できないのです」

ちなみに、加害者の男性は検察の取り調べに対し、衝突の瞬間にについてこう供述していた。

『右に見える建物を目で追いながら進行していたとき、突然衝撃を感じたのです。何事が起つたのか、びっくりして視線を前に戻すと、私の運転しているハイエースの前部に、單車がくついた状態で前進しており、すぐに別の自動二輪車が接近しており、まさに衝突寸前でした。慌ててブレーキをかけたのですが、到底間に合うような距離ではなく、その後、接近していた自動二輪車に次々と衝突させたのです』

この供述こそ、衝突してからバイクの存在に気づいたこと、つまりそれまで加害者は何も見ていないことを如実に表しているではないか……。

数々の疑問を拭えなかつた節男さん

は、休日を使つては福岡から岐阜県までたびたび出向き、事故現場で警察・検察の捜査や加害者の供述の矛盾点を徹底的に洗い直した。そして、残された最終手段として、加害者を相手に民事裁判を起こし、その中で再度事故の真実を明らかにすることを決意したのだ。

しかし、事故から約3年半後の2002年12月、福岡地裁で言い渡された民事裁判の判決は、加害者に100%の過失を認定したものの、節男さんがもっともこだわっていた、加害者の『居眠り』について言及することはなかった。

民事の裁判官は、加害者の前日か

らの徹夜運転などを踏まえ、「相当注意力の低下した状態だった」と表現したものの、「居眠りをしていたとは考

えられない」と断じたのだ。

ちなみに、道路交通法の66条には、

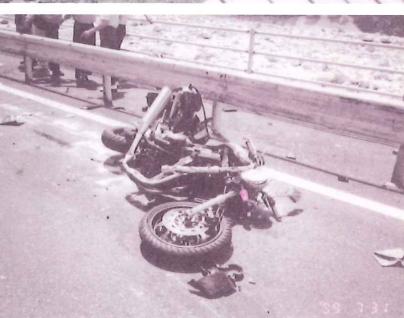
『過労運転等の禁止』として、以下の条文が綴られている。

『何人も、前条第一項に規定する場合（酒気帯び運転）のほか、過労、病気、薬物の影響その他の理由により、正常な運転ができないおそれがある状態で車両を運転してはならない。』

「過労運転」つまり「居眠り運転」は、法律上飲酒や薬物使用時の運転と同じく、大変危険な行為として位置付けら



(上) 事故直後の現場写真。センターラインを越え対向車線を走り続けた加害車両は、5台のバイクをなぎ倒して停止した。(右) 最初に衝突され激しく損傷した禎三さんのバイク。後部には2台目に衝突されたバイクの前輪が突き刺さっていた。



運転を交代した』と供述していましたが、いずれにせよ、約32時間、まともな睡眠を取らずに行動していたことは明らかでした

『被告人の一方的過失による事案とはいえ、その過失内容はわき見という前方不注視であり、酒気帯びや高速度走行等の反規範的な態様によるものではないこと……。(中略)これら諸事情を総合すると、本件においては被告人を決刑に処すべきであるとまで断ることとはできない。』(名古屋地方裁判所岡崎支部・岩井隆義裁判官)

結局、この事故は『わき見』によるものと認定され、加害者は執行猶予5年の付いた禁固刑が言い渡されたのだった。

前日の朝5時に起床。終日仕事をし、前日の朝5時に起床。終日仕事をし、その後、乗鞍岳へ日の出を見に行こう

ということになり、家族ら7名とレンタカーを借りたそうです。そして、午後10時に愛知県の三河安城市を出発し、そのまま徹夜でドライブをしながら乗鞍岳に向かい、事故当日の早朝、日の出を見て戻る途中だったのです。加害者本人は、『事故が起ころう10分前に

一通目の手紙から数日後、節男さんはから私のもとに送られてきた分厚いファイルには、たくさんの方針やメモが貼られていた。それは、刑事裁判が終わってから、ようやく遺族に開示され、贈写が許された刑事記録だった。

『刑事記録を何度も読み返しているうちに、長野県警木曽警察署や名古屋地検岡崎支部は、この事故においてもっと重要なポイント、つまり衝突直前の加害車両と被害車両の位置に関する検証をまったく行なっていないことに気がついたのです。

実は、事故直後、担当の警察官は私にこう言いました。『加害者は最初から最後まで、対向のバイクは見えていませんでした』と。仮に事故原因が単なる『わき見』だとすれば、対向車線を走ってくる6台のバイクを見落とすなどということがありうるでしょうか。

また、140~150メートルもわき見をしたまま走行することも通常で

り、死亡診断書、禎三さんの死の瞬間の写真、死亡診断書、禎三さんの死の瞬間

間について語られた加害者の供述調書……。こうした書類を1ページずつめくりながら、事故を再検証するという作業が遺族にとってどれほど過酷なことであるか……。

一度確定した刑事裁判の判決は、もう覆ることはできない。それでも節男さんは、自らの目で徹底的に刑事記録の検証を続けた。息子の死の瞬間、その真実をうやむやにしたずさんな検査だけは、どうしても看過することができなかつた。

節男さんは語る。

『刑事記録を何度も読み返しているうちに、長野県警木曽警察署や名古屋地検岡崎支部は、この事故においても

とも重要なポイント、つまり衝突直前の加害車両と被害車両の位置に関する検証をまったく行なっていないことに気がついたのです。

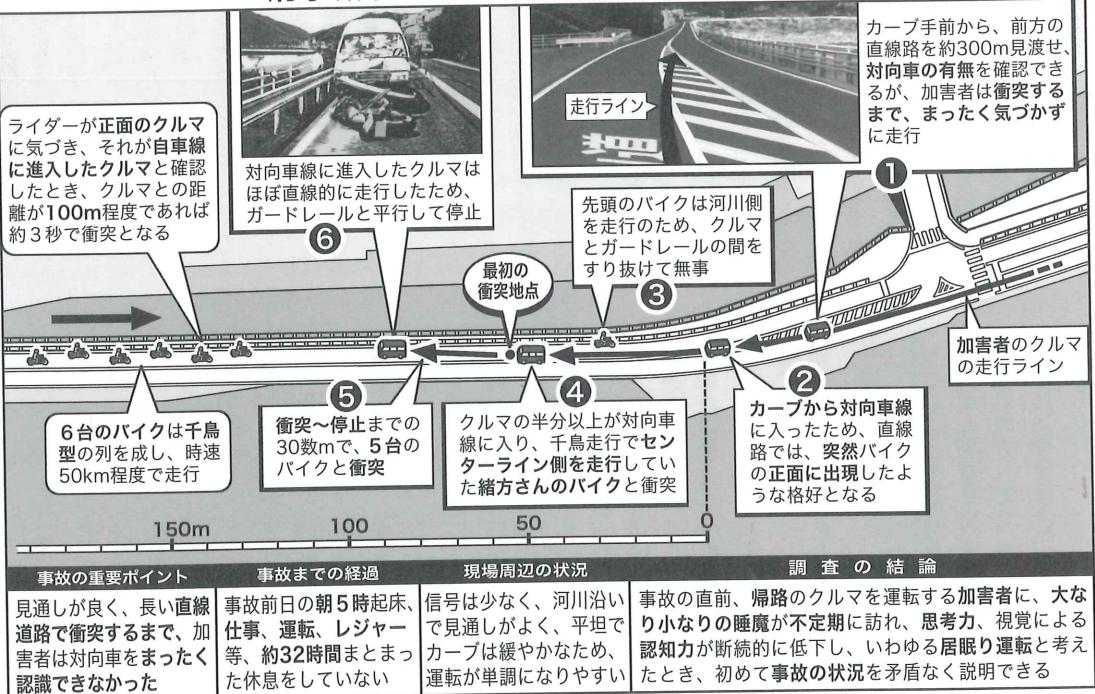
実は、事故直後、担当の警察官は私にこう言いました。『加害者は最初

から最後まで、対向のバイクは見えていませんでした』と。仮に事故原因が

単なる『わき見』だとすれば、対向車線を走ってくる6台のバイクを見落とすなどということがありうるでしょうか。

また、140~150メートルもわき見をしたまま走行することも通常で

刑事裁判の後、父親が調べた事故状況



「福三」といふがハハニ・阿蘇を元の人が好きでした。夏休みにうちへ帰つてると、朝5時には家を出て、大観峰まで走りに行くんです。それで、2時間ほど走つて帰つてきていましたね。早朝に出発するときは家の前でエンジンをかけず、必ず大通りの角までバイクを押して……。そんな子でございました」

自宅の二階には、禎三さんが高校時代まで使つていたという部屋がそのままの状態で残されていた。

本棚には、少年時代に節男さんと一緒に作つたというたくさんの精巧なプラモデルが今も整然と飾られ、愛読していたバイク雑誌も当時のまま並んでいる。壁に貼られた、少し色あせたワ

「医師国家試験の合格を家族で祝い、私が自宅で禎三を見送ったのは、6月15日の1時半頃でした。禎三はオーディのウインドブレーカーを着て、次兄から譲り受けたバイクを飛行機に乗せて名古屋へ運ぶんだと言い、福岡空港に向けて出発しようとしていました。私はくすぐれも気をつけて帰るようになると声をかけ、最後に『でもバイクはいくら自分が気をつけていても、空からモノが落ちてくるのと、対向車が突然突っ込んでくるのだけは避けられないからな』と、わざわざそう付け加えました。その言葉が、1か月半後、本当にになってしまったんですね。



「末っ子の禎三は、兄弟の中でも特に優しい子でした。夏休みに我が家へ帰つてくると、網戸の張り替えをしたりいろいろ手伝いをしてくれました。主人は禎三が亡くなつてからというもの医師会のおつきあいにもほとんど出なくなりました。口には出しませんが、辛かつたのでしょう。事故直後はお酒で紛らわせていることもありましたね」

イン・ガードナーのポスターもそのま
まだ。

高校を卒業後、長兄と次兄は父親と
同じ医学の道を志したが、楨三さんは
はまつたく別の進路を取った。しか
し、山口県の短大を卒業するとしばら
くして、

「お父さん、俺、医者になるから」

突然、そう告げた。節男さんは一言、
「ああそっか」と返すだけだった。

それから3年後、楨三さんはレース
も続けながら目標の医大に合格。周囲

れている。しかし、現実にはアルコール濃度の検知のように、「過労」を判定する明確な基準はない。

交通事故を扱つてきた複数の元警察官にも話を聞いてみたが、たとえ無理な徹夜運転が証明されたとしても、それが「過労」によって事故につながったか否かの立証は非常に難しく、時には事故前の足跡をたどるため、管轄外のエリアにまで調べが及んでしまうこともある。それもあって、どうしても簡易な処理で済む「わき見」のほうで大半の事故を処理してしまいがちなのだ。

「居眠り事故」が極端に少ない?
日本の交通統計に問題あり

実は、そんな日本の特殊な捜査事情を裏付ける統計データがある。

日本の交通統計によると、居眠りによつて発生する死亡事故は全体の約3%にすぎないが、海外の研究では、睡眠不足や疲労によつて起つる交通事故は事故全体の16～23%だといふ

会の報告(1994年)によると、午前2時～7時と午後2時～5時に発生した睡眠障害による交通事故件数は全体の41・6%を占めており、そのうち死亡事故の発生件数は36・1%にも上つているといふ。

以下は、節男さんが資料として求められた数多くの専門書の中の一節だ。

『睡眠不足による能力低下』の最も危険な点は、人が自分の能力がどのように落ちているのかに気づかないという点である。この現象は、睡眠薬やアル

F・H・ホーキンズ著)
「実は、事故から1か月後、加害者は
私にこう言つたのです。『いきなり、
バイクがぶつかってきたんです』と。
私は反省のかけらもないその言葉に、
強い憤りを覚えました。いきなりぶつ
かってきたのは、いつたいどつちなん
だ、と。あのときは、できることなら、
加害者が息子にしたのと同じことをし
てやりたいと、心底、そう思いました。
でも、こちらがそれをすれば殺人罪で
すからね……」

最後に見送った

息子のうしろ姿

「……」
禎三さんがいたあの時間はもう戻らない。けれど、緒方さん夫妻の瞳の奥には、最後に見送ったその後ろ姿が今も鮮明に焼き付いているのだろう。
ケニー・ロバーツさんは匂んだ大い
ベントを終えた翌日、私は緒方さん夫
妻と別れ、レンタカーで熊本空港に向
かつた。
途中、少し時間があったので、禎三
さんが好きだったやまなみハイウェイ
をトレースしながら、もう一度大観峰
を走った。
「立ち寄つてみるとことにした。
観光客の姿もまばらになつた駐車場
からは、雄大な阿蘇の外輪山が一望で
きた。
すでに日は傾き、夕陽に照らされた
スキの穂は金色に輝いていた。
『禎三さんも、きっとここから同じ景
色を眺めていたんだろうな……』
その瞬間、少し冷たい風がなにかを
優しく語りかけるかのように、金色の
穂を波のように揺らしながら通り過ぎ
て行つた。

観光客の姿もまばらになつた駐車場から、は、雄大な阿蘇の外輪山が一望で、立寄つてみることにした。
すでに日は傾き、夕陽に照られたススキの穂は金色に輝いていた。
『禎三さんも、きっとここから同じ景色を眺めていたんだろうな……』
その瞬間、少し冷たい風がなにかを優しく語りかけるかのように、金色の穂を波のように揺らしながら通り過ぎて行つた。

ン・ガードナーのポスターもそのま
だ。

高校を卒業後、長兄と次兄は父親と
じ医学の道を志したが、楨三さんだ
はまったく別の進路を取つた。しか
ら、山口県の短大を卒業するとしばら
して、

「お父さん、俺、医者になるから」

突然、そう告げた。節男さんは一言、
「ああそうか」

と返すだけだった。

それから3年後、楨三さんはレース
続けながら目標の医大に合格。周囲
受験生より少し遅れはとつたものの、
3歳で念願の医師免許を取得した。

「……」
禎三さんがいたあの時間はもう戻らない。けれど、緒方さん夫妻の瞳の奥には、最後に見送ったその後ろ姿が今も鮮明に焼き付いているのだろう。
ケニー・ロバーツさんを囲んだ大イベントを終えた翌日、私は緒方さん夫婦と別れ、レンタカーで熊本空港に向かつた。